

園のくらしを育む②

幼児と自然(2)

― 待つことや智恵を学ぶ ―

秋田喜代美


1 合わせること 待つこと

少子化と共に、家庭の中で大人が子どもに合わせて生活をする「子ども中心のくらし」になってきています。また遊びの中では、自分の思いをすぐに通そうとし、思いどおりにならないと調整ができずに泣く子や、手や足がすぐに出ていざこざになってしまう子ども低年齢では少なからずいるように思います。私は、親が子どもを大切に思うことも、遊びの中で子どもが自分の思いを大事にして発揮して実現していこうとすることも、とても大事ななことと思っています。しかし一方で、世の中では相手に応じることやそのために待つことが大事だということも、幼児期の園生活で少しずつ肌で感じていくことが必要です。

発達心理学では、このことは「自己主張」と「自己統制」という用語で説明されます。

しかし、「自己」を中心に、主張と統制という二項対立的概念で考えるよりも、かかわり合うものと共に暮らすとはどのようなことなのかという折り合いのダイナミズムや共生の感覚を培っていくことがとても大事です。なぜならその中で、かかわるものへの愛着や、いとおしみが生まれていくからです。たんに自己を抑制するというのではなく、かかわることによって思いどおりにならないからこそ学び、工夫し、喜び合うという、時間をかけた経験の流れを、家庭では得にくくなっているからこそ、大事にしたいと思います。自然、特に栽培や飼育という命あるもののかかわりや天候などの自然現象は、このことを子どもたちに無言のうちに教えてくれます。

いわき市立藤原幼稚園では、四歳のK君の「イチゴも種をまくと育つの？」という声を先生が聴き取ることから、みんなでの挑戦が始まりました。土の上にそのまま置いてみたら腐ってしまったり、イチゴの種をまいたはずが、芽が出てきて喜んだのもつかの間、大きな葉っぱが出てきて雑草であったことに気づいてがっかりしたりします。また、イチゴが種からも育てられることを学んだ子どもたちは、次には母の日のためにブチメロンの種をまいてみました。でも全然芽が出てきません。それでも再度挑戦してみると今度は発芽します。そこから、温度が影響することに子どもたちは気づいていきます。これら一つひとつの経験とそれからの学びや知識だけではなく、この経験のつながりの中で自然に対する興味や驚きの念、命の力強さや不思議さを感じる降り積もり経験を大事にしたいと思います。それが子どもという命ある存在と自然との間の共生や畏敬の感覚を培うと思うので



す。環境教育というような大きな言葉や活動ではなく、この日々の感覚の浸透が無意識の層で生き方を支えていくのではないのでしょうか。

冬の寒い日、相模原市あゆの子保育園の五歳のRちゃんは園庭の容器の中に氷が張っていることに気づきます。それを先生や友達に伝えるところから、クラスみんなでの氷作りが始まります。わくわくしながら朝、園庭の容器に走っていく子どもたち。次には砂糖や塩を入れたり、いろいろな容器を使ったりしてみます。毎朝一番に園庭に走っていく子どもたち。でも氷はできていません。気温5℃でした。何日目だったでしょうか。雨交じりの気温1℃の日に氷ができていました。子どもたちは水に関心をもって、寒さを忘れて園庭にいます。そうなると5℃や7℃の日にはT君は「今日は暑いなあ。暑い日だ」などと言ったりしています。それは相対的な温度感覚です。四季のある日本だからこそ、さまざまな局面で自然に合わせることや待つことの経験によって、子どもたちの心も共に醗酵し熟していくのを感じます。このような感覚を共に感じ生きていく保育者に、私はいつもみずみずしさを失っていない魅力を感じるのです。

2 自然の中でのくらしの智恵

自然というと科学的な活動が話されることが多いのですが、私は自然と共につき合って培われてきた日本の衣食住のさまざまな智恵の共有経験がなされることこそが、自然を科学的にかかわる対象として分けるのではなく、自然に囲まれ一体化して生きていくという

幼児のくらしを豊かにしてくれると思っています。よもぎ団子作りや野菜作り、米作りなど、自分たちで苦労しそれなりの時間をかけて集めたり、育てて収穫したりしたものを食べる経験によって、初めて「いただきます」という、ほかの命や育てた人への感謝の意をもつ言葉が発せられ、共に仲間と味わって食べる食卓の経験につながります。色水から始まって、草木の汁で布を染め、弦や糸を編み、木の実で飾りを作るなどの経験が、衣を自分の工夫で装う経験へとつながります。また住まう場を花々や葉で彩ることを子どもたちが心地よいと感じられることが、くらしを美しく飾ることの心地よさという、住まいのたずまいのあり方への感覚を培うことにつながります。

自然が戸外での経験だとすれば、それを取り込みながら、室内でそれを使って味わうくらしが送れることが大事でしょう。また反対に、絵本を読んでから戸外へ、巣箱や風車、こいのぼりなど、室内で作ったものが外へとつながることも大切です。外と内との流れが風通しよくつながることによって、子どもの感性が四季の変化と共に磨かれ、そこでのつき合い方の智慧を子どもなりに感じ取っていくことができるのではないのでしょうか。

幼児が自然とかかわることを、理科や科学の基礎を学ぶ経験として位置づけられるととらえるのみではなく、日本の風土の中で自然に活かされて培ってきた智慧のあるくらしを受け継ぐ生活者として育つための経験としてとらえていきたいという願いを込めて、自然をめぐる経験を保証していただきたいと思います。

(東京大学大学院教授)